

<前回：王国とは？>

(1) 王国がもたらしたもの

諸部族→12部族連合イスラエル→王国

1. 統一王国の意義
外敵（ペリシテ人は職業軍人の重装歩兵を有していた）への軍事的対抗
政治的安定・領土拡張
経済と文化の繁栄
2. 12部族連合・軍事指導者としての士師（＝反王権思想）
ヤハウエのみが支配者、人間が人間を支配すべきではない。
3. 調停者としての王
cf. 古代オリエントの王権イデオロギー：絶対権力者としての王
地上における神の代理、神の子、あるいは神的存在 → 近代の王権神授説
4. 王自身が一人の人間であり、罪人である。
ダビデの罪（ウリヤの妻バト・シェバを奪い妻とした）と預言者ナタンによる糾弾。
5. 文化の繁栄：文化活動の場としての宮廷
・ヘブライ文字の成立（ダビデ王時代との説もある）。
文学活動の開始：「ダビデ台頭史」（サムエル上16章～下5章）、「ダビデ王位継承史」（サムエル下9章～列王記上2章）、あるいは族長物語。
・学問の発展（書記学校の成立）→知恵文学・知恵思想、知者ソロモン
6. 経済の繁栄 → 古代イスラエルの絶頂（過去の理想化）
「栄華を極めたソロモン」（マタイ6.29、ルカ12.27）
南アラビアのシェバ（シバ）の女王がソロモンを訪問、栄華と知恵に驚嘆
8. 多民族国家イスラエル（←領土拡張）と民衆への重税・強制労働
9. 寄留者への配慮

(2) 王国期の宗教

10. 連合イスラエルからイスラエル王国（ダビデ＝ソロモン王朝）へ
部族連合と反王権主義の伝統への大きな変更
11. 王国形成は宗教の統合でもあった。
12. 神殿とは何か。

(3) 王権の意味

13. 「王」の出現の社会的条件
・インド・ヨーロッパ語族における身分制の三分（機能の階層分化）
 1. 主権（法／呪術）
 2. 軍事
 3. 生産祭政一致：三身分の上に君臨する「王」（神の子）
14. 皇帝の圧倒的な優位。
・オットー1世（912-73）：神聖ローマ帝国の開祖。
塗油＝皇帝の聖化、聖俗両面の最高位。ドイツや帝国における大司教や司教の選出に
関与（候補者のなかから選ぶ、あるいは自ら候補者を選ぶ）。国王が教会の頂点、宮廷が
教会の中心。
聖と俗が絡み合う体制＝王国（帝国）教会制。国王は聖戦を行いうる。
「十字軍が可能になるには、ローマ教皇権の強化が必要だった。」
15. 王権の問題は、古代、そして地中海文化圏を越えて普遍的。
16. 「支配」の問題：社会的な身分層が形成分化される際の「秩序・支配」
・「権威と権力」（法と儀礼）
・神と人間との媒介者・仲保者あるいは主権者

王権はこの文脈に位置する。

17. カール・シュミットの主権論、『政治神学』未来社。

「主権者とは、例外状況にかんして決定をくださる者をいう」(11)

(4) 主権の論理構造——アガンベンの場合——

18. シュミットの主権論あるいは「原初的な政治的構造」(アガンベン、1995、107)。

シュミットの主権論 → 逆説と例外という論理構造

19. 「主権の逆説は次のように言い表される。『主権者は、法的秩序の外と内に同時にある』。主権者は事実、例外状況を布告し、それによって秩序の効力を宙吊りにするという権力を法的秩序によって認められている者である。だとすれば、主権者は『法的秩序の外にありながら、法的秩序に所属している。というのは、憲法が全面的に宙吊りにされうるかどうかの決定は彼に任されているからである』。『同時に』という正確を期した表現は、ありきたりのものではない。主権者は、法の効力を宙吊りにする合法的な権力をもつことによって、合法的に、法の外に身を置く」(同、25)、「シュミットによれば、主権による例外化において問題になっているのは法的規範のもつ効力の可能性の条件そのものであり、また、国家の権威の意味そのものでもあるからだ。主権者は例外状態を通して『状況を創造し保証』する。」(同、28)

20. 主権の論理構造：「法的秩序の外と内」の「同時」の逆説性。

しかし、法という意味システムを根拠付けるものは何か？

21. システムの根拠付けをシステム内部から行なう際に発生する逆説(無限遡及のパラドックス)。

「現代の思考はあらゆる領域で例外の構造に直面している。したがって、言語活動による主権の要求とは、意味を外示と一致させようとする企てである」(同、40)。

意味と外示 → 意味と指示、言語の内と外

芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年、86-99頁。

22. 例外と宗教(宗教と政治との深みにおける同型性)

宇宙論的神の存在論証

・運動→原因結果の連鎖→無限の禁止→第一原因

・「第一原因」：「第一」+「原因」(qualifier + Model)。第一原因は例外である。

23. 暴力や欲望との連関。

「法は法でないもの(たとえば自然状態としての純粋な暴力)を、法が例外状態において潜勢的な関連をもつものとして自らを維持することを可能にするものとして前提する。主権による例外化(自然と法権利とのあいだの不分明地帯としての)とは、法的参照を宙吊りにするという形で法的参照を前提することである」(同、33)、「主権者とは、暴力と法権利のあいだが不分明になる点であり、暴力が法権利へ、法権利が暴力へと移行する境界線だ、ということである。」(同、50)

24. 「ホモ・サケル」(Homo Sacer)。

25. 「聖なるものという語の最古の意味が参照している政治的—法的現象を説明することを可能にするものは、聖なるものという大まかな宗教的範疇がもつとされる両価性などではない。その反対なのであって、政治的なものの圏域と宗教的なものの圏域をあらかじめ綿密に画定しておくことによってはじめて、両者の錯綜と複雑な関係の歴史を理解することができるのだ。」(同、116)

26. 「聖化は二重の例外化をなしている。それは人間の法からの例外化であるとともに神の法からの例外化であり、宗教的領域からの例外化であるとともに世俗的領域からの例外化でもある」(同、118)、「ホモ・サケルは、犠牲化不可能性という形で神に属し、殺害可能性という形で共同体に包含される。犠牲化不可能であるにもかかわらず殺害可能である生、それが聖なる生である。」(同、119)

27. 主権とホモ・サケル(例外における同型性)。

5. 歴史と終末

(1) 歴史と終末

1. 旧約的な歴史思考：

・ゲルハルト・フォン・ラート『旧約聖書神学Ⅱ イスラエルの預言者の伝承の神学』
日本基督教団出版局。

「西欧人がそこで多少とも素朴に生きている時間の表象は直線的である。時間は無限の直線に喩えられ、その線上に彼らは過去および未来の出来事を、彼らに確かだとわかる限りにおいて、記入できると考えている。この時間の線には中心がある。つまりわれわれの現在である。」(140)

「あらゆる出来事に先行する絶対的時間をイスラエルが知らなかったということ、これは今日確定している数少ないことの一つに属する。」

「二つの年代記的平行にあわせて一つの時間の直線に記入する試みをしなかった」、「両王国のそれぞれが自己の時間を保持している。」

「イスラエルが絶対的な直線的な時間という表象を知らなかったとすれば、時間をそれぞれの出来事から抽象することができなかったという点がさらに確定しうるように見える。彼らは特定の出来事なしの時間を考えることができず、ただ「充たされた時間」のみを知っていたのである。われわれ西欧の「時間」という概念を表わす言葉はそもそもヘブル語にはないのである。」(140)

オーラーム：遠い過去もしくは未来を意味する。

エーツ：「時点」「時期」という意味での「時間」

「すべての出来事はその特定の時間的秩序をもつのである。出来事は時間なしには考えられず、時は出来事なしには考えられない。」

「古代人はこの時間的秩序があらゆる人間的活動、否、そればかりか内的な感情にさえあてはまると考えていた。」

コヘレト3・1以下

「物事とか活動に定められた時を誤らず、その神秘にみちたカイロスを知るには、広く知恵を召集する必要があったのである。」

「彼が時そのものをそもそも知らず、人間生活が多くの際の流れから成り立つと考えられるのである。」(141)

「われわれの時間表象は線的だというとき、それがさらに終末論的でさえあると付け加えられるべきであろう。われわれの時間表象は、この言葉の厳密にキリスト教的な意味で、西欧では何千年も一貫して終末的であった。」(141-142)

「神の導きの下にある道としての歴史」「そこからは普遍的な世界の出来事を歴史としてと把える道はまだ開かれていない」(148)

「イスラエルが何百年もの間に全く別々の方向に向けて神学的に形成したこの歴史という概念は、この民族の偉大な業績の一つである。」(148)

「預言者による歴史思考の終末論化」

「ヘブライ人のメシアニズム」

(佐藤敏夫『永劫回帰の神話と終末論——人間は歴史に耐えうるか』新教出版社、40)

2. ティリッヒの「問いと答え」における「歴史と終末」

歴史の両義性（たとえば、善と悪）と、終末における一義性・一義化（最後の審判）

(2) 歴史という問い

3. 人間的現実としての歴史とその多義性

存在論的構造／伝統・思考方法／時代動向

人間存在の歴史性（すべての文化圏・民族は歴史を有する）。

キリスト教は歴史的思惟を特徴とする（ほかの伝統との対比）。

近代化は歴史化である。

4. 西欧近代と歴史主義

近代化は歴史化である。 → 歴史相対主義へ

価値や制度などが歴史の文脈で形成されたということの意識・自覚。

自然主義と歴史主義という対をなす思考形態成立（トレルチ『著作集 9、10』ヨルダン社）。

「近代化」の存在論的性格は《歴史化》と呼ばれるものであり、近代世界を貫いた社会変動は「自然」からの「自由」という性格をもっていること、「自由」の介入によって「自然」が「歴史」化する過程」（大木英夫『新しい共同体の倫理学 基礎編上』教文館、47）。

5. ティリッヒ「われわれの時代の根本問題としての歴史」（1939）（『著作集 8』白水社）

「この問いの統一が歴史のなかの一時代に性格を与える」、「その歴史的状况がもっている根本的問い」、「何がわれわれの時代の問題そのものであるのかというすべてを包括する問い」

「この問いに対する私の答えは、それは歴史である」、「それはわれわれの歴史的事実である」（218-219）。

（3）法則性と自由

6. ヘーゲル：絶対精神の自己実現と英雄。理性の狡知。

「歴史的人物、世界史的個人とは、このような普遍をその目的の中に蔵しているような人々」（『歴史哲学 上』岩波文庫、96）、「これらの個人は、その目的の中に理念一般に関する意識をもっていたのではなかった。彼らは実践人であり、政治家であった。しかし同時に、彼らは時代の要求と時代の趨勢とについての洞察をもつ思想家であった」（97）。

「情熱の特殊な関心と普遍的なものの実現とは不可分のものである」、「特殊なものは、互いに闘争して、一方が没落しつ行くものにほかならない。対立と闘争に巻きこまれ、危険にさらされるのは普遍的理念念ではない。普遍的理念は侵されることなく、害われることなく、闘争の背後にチャンと控えている。そしてこの理性が情熱を勝手に働かせながら、その際に損害を蒙り、痛手を受けるのは[理性ではなくて]この情熱によって作り出されるものそのものだということを、われわれは理性の狡知（List der Vernunft）と呼ぶ」（101）。「神が世界を統治するのであって、その神の統治の内容、神の計画の遂行が世界史である。そうして哲学は、この計画をつかもうとする。というのは、この計画に基づいて実現されたもののみが現実性をもつのであり、それに外れたものは単に腐った実存（faule Existenz）にすぎないからである」（107）。

7. マルクス：世界史の法則性と人間の自由。

・「無名の存在を現実的基盤として理解する」、客観主義的、構造主義的な解釈。古典的な正統マルクス主義の立場、諸個人を完全に括弧に入れる。

共産主義社会は歴史の必然性において成立する。客観的法則の自動的な展開。

・「諸個人の役割の優位性」。革命家の主体的な歴史参与の必要性。（リクール『イデオロギーとユートピア——社会的想像力をめぐる講義』新曜社。第五回、第六回）

cf. ティリッヒのマルクス論

8. レーヴィット：キリスト教的歴史観の世俗化としてのヘーゲル、マルクス。

「この市民的キリスト教的世界のキリスト教が既にヘーゲル以来、特にマルクスとキェルケゴールによって最後になったからと言って、もちろん、かつて世界を征服した一つの信仰がその世俗化した姿の最後のものと共に老衰したということには、ならない。じっさい、この世におけるキリスト教の巡礼が、一度も故郷としてすんだことない所で、どうして故郷を失うということがあり得ようか」（レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへ II』岩波書店、213）。

the following outline aims to show that philosophy of history originates with the Hebrew and

Christian faith in a fulfilment and that it ends with the secularization of its eschatological pattern.
(Karl Loewith, *Meaning in History*, The University of Chicago Press, 1949, p.2. cf. K. レーヴィット『世界と世界史』岩波書店、『歴史の意味』未来社。)

(4) キリスト教的思想の文脈で

9. 自由意志と神の恩恵：パウロ→アウグスティヌス→ルター

予定・摂理

10. 自由意志の擁護と原罪概念

ペラギウス論争、セミ・ペラギウス

ルターの奴隷意志論、エラスムスとの自由意志論争

11. 賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009年。(Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.)

「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることでそれが人間の活動を要求する」、「神の呼び起こされた愛の結果」(45)

「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「愛の可能性への信仰」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない」、「おのれの神信仰が言葉だけの皮相な信仰にとどまる、自己中心的な人たちがいる」、「神の創造の業、とくに人間を愛し得ないなら、その愛は自己矛盾を抱えている」(46)

10. 神の恩恵が自由意志を可能にする、という仕方での解決。

→ 神のリスク(弱い神)と人間の責任。

(5) アウグスティヌスの終末論——古代の黙示的終末論からの離脱

11. 古代ラテン世界最大の教父であるアウグスティヌスの終末論と歴史神学

先行する二つの立場、つまり千年王国論とオリゲネス主義との対決。

12. アウグスティヌスも始めから千年王国論に否定的だったわけではない。

「聖書に、「主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」と記されているので、この日の六日間としての六千年が満了したのち、最後の千年間がいわば安息日であるかのように第七日目がそれにつづくのであって、明らかにこの安息日を祝うために聖徒たちがよみがえるというわけである。この見解は、その安息日において、主が現前しておられることによって聖徒たちに何らかのたのしみがそこにあるのなら、とにかく認められるであろう。じっさい、わたしたちも一時期、この見解をもっていたのであった。……ところで、霊的な人びとはこのような見解を信じる者を、ギリシア語で「キリアスタ」と呼んでいる。わたしたちはそれと同じ意味をもつことばに移して、「至福千年論者」と呼ぶことができよう。」(アウグスティヌス、1991、140-141頁)

13. 「アウグスティヌスの初期の作品には、もっと古い千年王国の観念の影響が窺える」、「黙示文学的な期待の残響が見られる」(マーカス、1998、41頁)。

14. 『神の国』の時期：千年王国論を明確に否定する。

まず、「千年」という言葉について、「ヨハネは、この世の年数の全体の代りに『千年』を用いたのである。それは、完全な数によって時の充満があらわされるためである。……『千の代に』が『よろず代に』と解されてもよいであろう」(アウグスティヌス、1991、142頁)。ヨハネ黙示録のテキストをオリゲネスと同様に比喩的に解釈することによって(アウグスティヌス、1991、184-188、210、237頁)、千年王国論を避けようとしている。

15. 教会に現前するキリストの支配

「現在でさえ、教会はキリストの王国なのであり、天の王国なのである。それゆえにまた、キリストの聖徒たちは、たしかにかのときに支配するのはちがった仕方によるのではあるが、現在もかれらはキリストと共に支配しているのである。とはいえ、毒麦は、キリストと共に支配しているわけではないけれども、教会のなかで小麦と共に成長しているのである。」(アウグスティヌス、1991、156-157頁)

したがって、キリストと聖徒たちによる「千年間の支配」はすでに教会の中に現前しているであり、「教会は現在においてもキリストの御国」(アウグスティヌス、1991、158頁)なのである。

16. 「第七の時代は現在の第六の時代の中にとりこまれて併存し、終末に向かいつつある今、キリストが教会の中に現存することにより悪魔を縛ってその行動を拘束し、洗礼と秘蹟の恵みによって聖徒の第一の蘇りがおこりつつあるというべきであろう」(坂口、1999、20頁)、と。

アウグスティヌスの終末論は、オリゲネス主義的な歴史循環論の残滓を払拭した点で、古代的なものから決別した。しかしそれは、物質主義的なものより、霊的なものにいたるまで一切の千年王国説を否定した。だがそのために、千年王国説に内蔵されていた未来主義的志向をも抹殺してしまった。(坂口、一九九九、二七頁)

(6) フィオーレのヨアキムと歴史神学

17. フィオーレのヨアキム(Joachim of Fiore) 1130頃-1202

イタリアの神学者、神秘思想家。南イタリアのカラブリア地方のフィオーレに修道院を開く。独特の三位一体論に基づいた歴史神学を展開し、フランシスコ会を始め、中世以降の千年王国論に大きな影響を与えた。

18. フィオーレのヨアキム(Joachim of Fiore、1130頃-1202)は12世紀を代表するキリスト教思想家である。エルサレム巡礼において霊的照明を受けた後、シトー会の修道士となり、修道院長に選ばれる。晩年、南イタリアのカラブリア地方のフィオーレに新修道会(1196年に教皇の認可を受ける)を設立し、独特な歴史神学を展開した。ここでは、ヨアキムの聖書解釈と歴史神学とを概観し、その上で、平和の問題との関わりについて論じたい。

ヨアキムの聖書解釈は、古代から中世にかけて展開された聖書解釈学、とくに聖書テキストの霊的解釈の伝統に依拠している。2世紀後半までには字義的意味、寓意的意味、道徳的(比喩的)意味、神秘的(上昇的)意味という聖書テキストの四重の意味論が成立していたが、ヨアキムは聖書の霊的意味をめぐる複雑な理論を展開し、字義的意味、予型的意味、観想的意味という3つの意味から、調和(concordia)と寓意(allegoria)の区別に基づく15の意味に至るまで、意味の諸階層を詳細に論じている。注目すべきは、この聖書解釈が、神論そして歴史神学と緊密に結びつけられている点である。神が自らを歴史的に啓示し歴史過程を導く存在であるならば、それは現実の歴史過程に何らかの仕方で反映しているはずである(神と歴史の同型性)。もちろん、歴史の出来事自体が神の歴史支配を明示しているわけではないが、聖書は神と歴史の相関関係の証言として解釈できる。ヨアキムにとって、聖書の霊的解釈とはまさにこうした機能を果たしていたのであり、それは、神の三一性に基づいて歴史過程を三一的に構築する歴史神学を帰結することになる。

こうして、歴史過程全体は、父の時代、子の時代、聖霊の時代という三つの時代の継起として解釈された。しかも、この三つの時代の継起は、三位一体の三つの位格が相互内在していることに対応して、有機的な相互に重なり合った内的連関を有している——ティリッヒ(1886-1965)はこれを弁証法的な関係と解釈している(ヘーゲルやマルクスの歴史哲学の原型)——。先行する時代の中には続く時代がすでに萌芽として始まっており、先行する時代は続く時代の中に持続的に作用している。たとえば、父の時代の第三区分(ウジア王からキリスト誕生)は、同時に子の時代の第一区分(萌芽期)を意味する。とくに、

ヨアキム以降の黙示的終末論にとって問題になるのは、第三の聖霊の時代——これは、修道生活の発展の中で開始され、ヨアキムの時代は聖霊の力が明瞭な仕方で発揮される開花期に入ろうとしている——である。三つの時代が、イスラエル民族、教会、修道院に対応することを考えれば、この歴史神学は解釈しただけでは、教会にとってきわめて危険な思想となり得ることがわかる。なぜなら、この歴史神学は、教会と国家に基盤をもつ既存の世界秩序が聖霊の時代（高次の秩序）によって歴史的に乗り越えられることを含意するからである。

この歴史神学の革命的な意義は、アウグスティヌス(354-430)の歴史神学と対比するとき、より鮮明になる。アウグスティヌスによれば、歴史的現実、教会も含めて、神の国と地の国という二大原理によって規定された混合体であるが、千年王国は教会的秩序の中にすでに存在しており、この歴史的現実、歴史の内部では乗り越えられることはない、つまり、教会と国家の既存の秩序は終末まで存続するとされていた（保守的）。しかし、ヨアキムは、この既存の秩序が歴史の内部で次の秩序に移行することを示唆する。ヨアキムの歴史神学は、既存の秩序の批判と新しい来るべき秩序へのヴィジョンを伴う点で、西欧の革命思想の原型となり、影響は、13世紀のフランシスコ会の急進派から近代にまで及んでいる。

以上のヨアキムの歴史神学と平和の問題との関わりを考える際のポイントは、ヨアキムの思想が平和の問題との関連で、一見すると正反対の仕方で解釈できることである。一方で、この歴史神学は、既存の秩序と来るべき秩序との対立を主張する点で、革命理論や革命戦争のイデオロギーとして機能することができる。これは、ヨアキムの終末論と正戦論との結合の可能性であり、平和構築の努力と対立するものとなる。ヨハネ黙示論が反エコロジック的であるとの批判は、ヨアキム型の黙示的終末論のこの危険性に関わっている。しかし他方、ヨアキムの歴史神学は、既存の秩序の閉塞状況（絶望的なまでの格差や不正義の現実、復讐の悪循環）の中で、それとは別の秩序を構想する可能性にも関わっている。これは、悪や戦争の現実の中で、なおも平和の希望を保持することを可能にするものであって、平和思想の基盤と言える。ティリッヒは、これを非現実的なユートピア主義を乗り越える希望のユートピア精神と呼んだ。これらのいずれの仕方でヨアキムの歴史神学を継承するかは、まさに今日の平和の神学の課題であると言えよう。（『キリスト教平和学事典』教文館、2009年、より）

19. 聖書解釈から歴史理論： ・神が歴史を支配する ・聖書がそれを語っている

三位一体論：内在的 → 経綸的・歴史的

「三つの位格を有する神が歴史の主であるならば、聖書の本文にある歴史的叙述はこの真理の現れとして理解されねばならない。」（マッギン、173）

20. ヨアキムの歴史解釈

- ・父の時代／子の時代／聖霊の時代
- ・三つの時代の相互内在 → 歴史の弁証法
- ・未来としての聖霊の時代

21. 「これはまったく不自然な時代区分であるように見える。……それにもかかわらず、ここには歴史的発展に対する深い洞察が含まれている。というのは新しい時期はけっして突然にはじまるのではないからである。むしろ新しい時代はそれぞれに先行する時代のなかには生まれ、そのなかから生まれてくる。このことをカール・マルクス以上に明瞭に認識した人はいない。彼は、たとえば社会主義がブルジョワ階級のなかにはいかにはられたか、またブルジョワ階級が封建体制のなかにはいかにはられたか、という彼の叙述においてその認識を示している」（ティリッヒ、277）

（7）二つの終末論——イデオロギーとユートピア

22. ティリッヒ『ティリッヒ著作集・別巻二』白水社、257-276頁。

「フィオーレのヨアキム（彼の創設になるカラブリアの修道院の場所によってこう呼ばれる）は、ちょうどサン・ヴィクトールのフーゴーが現実のサクラメントの解釈を提供したように、歴史のサクラメント的解釈を与えた。彼の歴史哲学はアウグスティヌスのそれとは対立するものであって、アウグスティヌスの歴史哲学が多くの保守的運動の背景をなしているのに対し、ヨアキムの歴史理解は中世および近代における多くの革命的運動の根底となった。」

「アウグスティヌスはキリストの千年支配を現在すでに開始しているものとし、それを教会のヒエラルキアおよびその神的恩寵手段による支配と同一視する。教会はそのサクラメント的力によってキリストを直接媒介する媒介者であり、キリストの千年にわたる君主的支配は教会の君主的支配と一致することになる。……教会が批判されるのはそれが混合体 (corpus mixtum) である限りにおいてであり、その基礎に関しては批判され得ないのである。アウグスティヌスはこのような仕方で、千年王国の期待の中にひそむ教会に対する批判および脅威をとり除いたのである。」

「ヨアキムは千年王国の到来という表象を新しいものとした。……フランシスコ会のラディカルな方向は、これらの理念を自分のものとし、それらを自分自身の属する修道院に適用し、そこから教会を批判した。多くのセクト的運動やアメリカにおいて影響をもつようになった宗教改革のセクト主義者たちは、直接的にせよ間接的にせよ、フィオーレのヨアキムに依存している。」

23. バーナード・マッギン (1998、361) :

「終末の日に到来し、あらゆる人間悪を総括するただ一人の人間という伝説的人物への信仰は、われわれにとって、もはやほとんど不可能であろう。しかし、この千年紀が終わろうとするとき、われわれは、今なお、われわれひとりひとりの内と外にある欺瞞、そして、もっとも警戒を要すべき全世界に跨る悪としての欺瞞、つまり、キリスト教徒が時代を問わずキリストの本質と信じてきたものに反する悪について、反省する必要がある。」

<参考文献>

1. ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』平凡社。
2. W. イエシュケ『ヘーゲルの宗教哲学』早稲田大学出版部。
3. 加藤尚武編『ヘーゲルを学ぶ人のために』世界思想社。
4. 権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』岩波書店。
5. シュネーデルバッハ『ヘーゲル以後の歴史哲学』法政大学出版局。
6. 安酸敏眞『歴史と解釈学——《ベルリン精神》の系譜学』知泉書館。
7. 金子晴勇『キリスト教思想史入門』日本基督教団出版局。
『ルターの間人学』『アウグスティヌスの人間学』創文社。
8. 山田望『キリストの模範——ペラギウス神学における神の義とパイディア』教文館。
9. 大木英夫『終末論』紀伊國屋新書。
10. 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。
11. モルトマン『神の到来 キリスト教的終末論』新教出版社。
12. G. ザウター『終末論入門』教文館。
13. ティリッヒ『キリスト教思想史I』（ティリッヒ著作集 別巻三）白水社。
14. 金子晴勇編『アウグスティヌスを学ぶ人のために』世界思想社。
15. R. A. マーカス『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館。
16. バーナード・マッギン『フィオーレのヨアキム——西欧思想と黙示的終末論』平凡社。
17. 坂口昂吉『中世の人間像と歴史——フランシスコ・ヨアキム・村ヴェントゥラ』創文社。
18. マージョリ・リーヴス『中世の預言とその影響——ヨアキム主義の研究』八坂書房。